

心理学と人称の問題

川津茂生

国際武道大学体育学部

心理学における人称の問題を考察していくと、三人称化する科学的な心理学の枠を乗り越えていく、哲学的な思索が必要となってくる。その問題を生活という基盤まで遡っていくときに、二人称的なものをも含む哲学的な心理学の視野が開ける。そこにおいて、人称の理論というものが、一つの根本的な理論として出現していかねばならない。

Keywords: 人称 生活 心理学 哲学

生活することから見た人称問題

心理学において人称の問題は2つの領域で出現する。1つには意識と脳の問題がある。すなわち、一人称の意識が三人称である脳からどのようにして出てくるかという問題である。2つ目に、病的な心理状態における人称的対立の問題がある。すなわち、自己における一人称的なものが、他者からやってくる三人称的な自己イメージと対立した場合の苦悩をどのように和らげていくかという問題である。これらの2つの問題はどちらも、対立を媒介とする二人称によって理論的に解決していくであろう、というのが川津のこれまでの主張である。

心理学は現代では主に科学的な方法で研究されている。しかし、科学的な方法というものはすでにその方法のうちに、人称の問題に対する方法論的な立場を取ってしまった。というのも科学は基本的に一切を対象化するのであるから、要するに三人称化していくのである。ところが、人称の問題を掘り下げていくことは、この全てを三人称化する方法自体を再検討していくことになるから、科学的な方法それ自体の基盤を切り崩していく可能性が出てくる。すなわち、科学する主体である科学者また科学的心理学者の立っている場所また基盤を再検討し直すことになっていく。科学の前提そのものを問い直していくこのような作業は、当然のことながら哲学的なものとならざるを得ない。

哲学的に人称の問題を考えていく場合には、我々が生活人であるということそれ自体から出発していくことが必要になる(川津, in print)。というのも、人称的なスタンスが個々人において形成されてくる現場は、その人の生活そのものであり、人称の問題に対する立場というものは、そういった生活の具体性の中からしか出現してこないからである。

生活の中では、対象化ということに対して、その対極にある方法として「対面化」(あるいは、二人称化)ということが考えられる。この場合対面すること自体をどこまでも対象化していくならば、対面状況の対象化は可能である。しかしその時、対面化する姿勢はすでに一步背景に退いてしまっている。しかし、対面するという事に留まれば、対象化する方法こそが一步背景に退くことになる。

ところが、対面化状況での最も深刻な問題は、対面

する相手との間の愛の関係になっていく。したがって、そこにおける問題はもはや科学的な知の問題ではなく、倫理の問題である。というのも、愛の問題とは優れて人称的な問題なのである。

ここにおいて、倫理的なブレイクスルーが知的なブレイクスルーになっていくという、根本的に哲学的な解決の方向性が見えてくる。言い換えるなら、倫理的なまた人格的な成長を通してのみ見えてくる全く新しい知の世界がある。科学的な知というものは、一般的には科学者の人格的な成熟度とは関係なく、知性の成熟によってのみ展開していく。しかし、科学が行き詰まった現代では、新しい知は倫理的な人格的な成熟を伴ってのみ拓けてくる地平によってしか発見できないのである。というのも、私のいう「先駆的二人称」

(川津, 2007) という概念はそういった倫理的なブレイクスルーによってのみ、意味が理解できるものなのである。

しかし、そこにはある一定の論理性も出現していく。その論理性は倫理性の成熟を伴いつつ出現する論理性であって、そこには截然とした論理と倫理の分離はないのである。

自己犠牲を伴う愛というものが自己において成長していくときに、知的な視野も成長していき、新たな地平が開けていく。人称の一般理論というものはそういった形でしか理解されないものなのである。そのようにして得られる知識は公共客観的には確認できないという批判も可能であろう。しかし、そういった新たな知の地平が多く古典的な著作の示す人類共通の知的遺産である一定の哲学的な見方と照応していくときに、いわゆる科学的なエビデンスとは全く異なるけれども、歴史的な文脈の中での別の意味でのエビデンスを持ち始め、一定の強い確実性を有するようになる。そしてそういったものこそが、今必要とされている真のブレイクスルーなのである。

自己が一人称を捨てて二人称になっていくということは、そのことを知的に、また言葉の上で理解できたとしても、それは真の理解とは言えない。それはそうになっていくというプロセスを自分自身が経験していくときに初めて納得できていく事柄なのである。それを命題の複合として理解できたとしても、それだけでは実際はそれがどういうことなのか、全く理解できない。ところがそれをそのように経験によって理解していくときに、そこにある確実な弁証法的な論理性が現

れ、しかも、その論理性によって、それ以前の知的な世界までもが変貌していくのである。しかもそれは私秘的なことではなくて、客観的なサポートを歴史の中に溢れるほど持っているのである。

倫理の中にしかない論理というものが、人称の理論として表現できるというのが私の主張である。そしてまた、心理学における人称の問題は、この方法を用いなければその本質的な解決はあり得ないというのが私の主張である。

対象化していく知性は、「対面化」していく知性によって補完されねばならない。人称の言葉で言えば、三人称化する知性は、二人称の知性によって補完されていくのである。ということは三人称化する知性の背後にある論理性も、二人称の論理性を出現させるものである歴史性あるいは時間性の中に展開する弁証法的な論理によって補完されていくということである（川津, 2016）。しかもこの弁証法的な論理は、自己がその基盤である人称性の問題で悪戦苦闘する経験の成熟の中ならその経験の持つ論理性として出現するのである。

このようにして三人称化する知性が、二人称的なものによって補われ、またさらには一人称的なものをも包含していくときに、そこには人称の理論というものが現れてこなければならない。その理論は対象化を基盤とした科学的な心理学の枠を大きくはみ出していく。それ故そういった理論は哲学的となり、心理学に

留まるとすれば、それは哲学的な心理学と呼ばれねばならない。

すなわち、人称の一般的な理論が哲学的心理学として出現することが期待されているのである。そこにおいてはいわゆる科学的なエビデンスはもちろん認められるが、それとは全く次元の異なる歴史的なエビデンスが承認されねばならない。それは簡単に言えば、自己の倫理的なまた人格的な経験の成熟の中にあるロゴス的なものが現れるときに、それが多くの古典的な哲学、文学、宗教の作品と照応し呼応していくということからくる明証性（エビデンス）でもある。

そういった性格の異なるエビデンスを統合して全体的な知的世界を作ることはこれまでは困難であった。しかし、そのような全体的な知的世界を、人称の理論がとりわけ一般的な人称の理論というものが構築していくことが、今可能となりつつあるのである。

引用文献

- 川津茂生 (2007) 先駆的二人称から見た存在 国際基督教大学 教育研究 49 21-29
川津茂生 (2016) 二人称の問題 国際武道大学研究紀要 第31号 117-122
川津茂生 (in print) 生活の中の人称 (仮題)